

## 今後の水産高校教育に関する検討会議 議事録

□日時 平成22年7月23日(金) 13:30~15:30  
□会場 福井県立大学小浜キャンパス 交流センター1階 多目的ホール  
□出席者 委員：荒木委員、石原委員、浦谷委員、国田委員、小坂委員、重田委員、下亟委員、青海委員、中島委員、松浦委員、山森委員(11名、五十音順)  
ゲストスピーカー：神奈川県立海洋科学高校 島山教頭  
□事務局 広部教育長、小和田高校教育課長、豊北教育政策課長

### ○開 会

教育政策課長

ただ今から、今後の水産高校教育に関する検討会議を開催いたします。皆様方には、お忙しい中、また非常にお暑い中、会議に御出席いただき、誠にありがとうございます。それでは、開会に当たりまして、広部教育長からごあいさつを申し上げます。

### ○教育長あいさつ

広部教育長

本日は、ご多忙の中、ご出席いただき、厚くお礼申し上げます。また、県立大学にこの会場をお借りしたことにつきまして、大変ありがたく思っております。昨年10月から今年5月にかけて、高校再編にかかる若狭地区の懇談会を3回開催し、地区の県立高校の現状や課題等についてご説明し、意見交換をさせていただきました。出席された皆様からは、地元産業の将来を担う人材の育成拠点として職業系専門学科に寄せる期待とともに、生徒の大学等への進学希望に十分応えられる教育体制の必要性など、様々なご意見を賜りました。

若狭地区の高校再編に当たりましては、学校の小規模化が進む中、小浜水産高校において県内で唯一実施しております水産教育を、今後どのように充実していくかが大きな課題でございます。このため、今回、地元水産関係者、学校関係者をはじめ、学識経験者、行政関係者など、各界各層の方々にお集まりいただき、会議を開催し、本県の水産業の現状等を踏まえ、高校再編の如何に関わらず、今後求められる水産教育の姿について幅広く議論していただくという思いで、この会議を開催させていただきました。

全国的に水産高校を取り巻く環境は大変厳しく、現在、水産系学科を持つ高校は国内で48校、在籍生徒数は、中学校卒業生数のピーク時であった平成元年度には、約1万6千人でしたが、昨年度で言いますと、1万人を割っております。ピーク時よりも約4割減っているわけです。

こうした中、今回の会議には、特色ある水産教育を展開し、進学・就職に大きな実績を上げ、県外からの志望者も多い「神奈川県立海洋科学高校」の島山教頭先生にもお越し頂きました。非常に先進的な水産教育をされているということで、本日も無理を申しあげて出席していただいたわけでございます。後ほど、同校の取組み等についてご紹介いただくことになっております。

今後、魅力ある水産教育を推進するため、今回は、高校再編についてはひとまず横におき、水産教育を充実していくにはどうしたらよいかを視点を置いて、この検討会議を進めてまいりたいと思っております。本日は、皆様方それぞれのお立場から、忌憚のない御意見をいただくことをお願い申し上げます、あいさつとさせていただきます。

### ○出席者紹介

教育政策課長

それでは、議事に入る前に、本日御出席の委員の皆様方をご紹介します。向かって左側から、地元の産業界代表として、

小浜の阿納地区で民宿経営やふぐの養殖等を行っておられる 下亟様  
小浜の宇久地区で民宿経営や定置網漁等を行っておられる 浦谷様  
小浜の西小川地区で民宿経営やふぐの養殖等を行っておられる 中島様  
福井缶詰㈱代表取締役社長 重田様

県漁業協同組合連合会小浜支所長 松浦様

本日、ゲストスピーカーとしてお招きした

神奈川県立海洋科学高等学校教頭 島山様

学識経験者代表として、

福井県立大学海洋生物資源学部長 青海様

小浜水産高等学校前校長 国田様

水産行政代表として、

県農林水産部水産課長 石原様

小浜水産高等学校から、

小浜水産高校校長 山森様

同校教諭で海洋科学科主任 荒木様

同校教諭で食品工業科主任 小坂様

以上の皆様方でございます。

また、県からは、広部教育長と私のほか、高校教育課長の小和田が出席させていただいております。

なお、本日は、小浜水産食品加工協同組合の田中組合長、県農林水産部の安達水産企画幹にもご出席いただく予定でしたが、お仕事の都合上、ご欠席されております。

### ○事務局説明

教育政策課長

それでは、議事に移らせていただきます。まず、資料をご確認ください。次第、会場配置図、出席者名簿以外に、資料1「本県水産高校教育の現状と課題」、資料2「小浜水産高校の現状と取り組み」資料3「神奈川県立海洋科学高等学校概要・特色ある取り組み」となっております。

それでは、資料1に基づき、本県水産高校教育の現状と課題についてご説明いたします。

1ページをご覧ください。中学校卒業生数の推移（見込み）でございます。県内の中学校卒業生数は、平成元年3月の13,483人をピークに減少し、昨年度に生まれた子どもたちが高校生になる平成36年3月の卒業生は7,018人と、ピーク時の約52%まで減少する見込みです。小浜水産高校のある若狭地区につきましても、平成元年3月の1,004人をピークに平成36年3月には510人と、約51%まで減少する見込みです。

2ページをご覧ください。小浜水産高校の志願者・定員・入学者数の推移ですが、これは、毎年9月に公表している中学3年生を対象とした進路志望調査結果の志望者と入学定員を、平成15年度以降、比較したものでございます。

小浜水産高校については、3学科を「水産科」という総括りの形で調査を行っており、その志望者は、定員の30%台だった数年前よりは少し上がっているものの、現在でも定員の50%程度、40～50人という状況です。特に、水産経済科の志望者数が少なく、毎年、2次募集を実施している状況です。

また、入学者数の推移については、平成19年度は定員を確保しましたが、ここ3年は定員割れが少しずつ大きくなってきております。「公立高等学校の適正

配置及び教職員定数等に関する法律（標準法）」には、「3学年で240人を下回らない」という最低限の基準がありますが、中退者もいる関係で、平成22年5月1日の生徒数は209人と、240人を割っている状況でございます。

3ページをご覧ください。小浜水産高校卒業者の進路状況でございます。小浜水産高校卒業生の進路状況は、約1/3が進学、約2/3が就職です。就職は県内が約7割を超え地元志向が強いわけですが、漁業への就職は極めて少なく、最近では、20年3月に1人、22年3月に2人就職しており、また、水産関連業種への就職も、最近では10人程度と少ない状況です。

4ページをご覧ください。少子化に伴う県立高校再編は、適正な学校規模を確保し、学習や部活動等での教育効果を高めていく意味で全国的な課題となっております。若狭地区においても、地区の関係者の方にお集まりいただき、これまで3回、高校教育懇談会を開催しました。この資料は、第3回目の懇談会で提示したものです。

方向性1は、若狭東高校と小浜水産高校を総合産業高校として統合し、平成25年度から若狭高校と総合産業高校との2校体制にした場合、方向性2は、現行の3校体制を維持した場合です。懇談会では、伝統ある水産高校、水産教育を残してほしいという意見がある一方で、若狭地区の普通科の定員の割合を他の地区並みに高めてほしいという意見もございます。

5ページをご覧ください。学習指導要領における水産専門科目の一覧です。高校の水産教育については、現在の学習指導要領では「水産基礎」から「ダイビング」まで20科目があり、小浜水産高校では、機械・電気・通信など工業系の5科目を除いた15科目と、学校設定科目の「福井の水産」が開設されています。

また、新しい学習指導要領が平成25年度入学生から年次進んで実施されることになっております。海を取り巻く情勢の変化等に着目し、水産・海洋資源の持続的・有効的利用、魚食文化、環境保全など、水産や海洋を幅広く学習に取り入れる趣旨から、科目の新設や整理統合、名称変更により、右側の22科目に再構成されることになっております。

例えば、5番目にある新規開設の「水産海洋科学」とは、「水産海洋基礎」の知識と技術を基に、発展的な学習を通じて、水産および海洋を幅広く、科学的にとらえる能力と態度を育てることを目標としております。具体的な内容としては、海洋と生活、海洋の科学、海洋の新しい展開、海洋に関する探究活動が盛り込まれています。

また、22番目にある新規開設の「マリンスポーツ」は、マリンスポーツを通じて、海洋や河川での諸活動や生活を円滑かつ安全に行うために必要となる基礎的・基本的な知識、技術等を身に付けるとともに、法やマナーを遵守し、海等の安全の確保に貢献する態度を育てることをねらいとしております。具体的な内容として、海の活用、フィッシング、レジャーダイビング、海洋レジャー、海における安全確保などが盛り込まれています。

また、これまで以上に海洋の内容を取り入れるため、「水産基礎」を「水産海洋基礎」に、より広く海洋における情報を扱うため、「水産情報技術」を「海洋情報技術」に、海洋に生息する生物を幅広く取り扱うため、「水産生物」を「海洋生物」に名称変更しております。

さらに、水産における食品素材を基本としつつ、必要に応じて様々な食品を取り扱うことができることを明確にするため、「水産」という言葉をとって、「食品製造」「食品管理」と名称を変更しております。

6、7ページをご覧ください。今後の水産海洋教育の在り方についてです。小浜水産高校の教育の取組みについては、この後学校側から説明がございしますが、地域の水産業等への人材育成、大学等への進学の高まりを踏まえた教育など、こ

れからの水産教育がどうあるべきか、どう魅力ある教育を展開していくかが、再編如何にかかわらず大きな課題であります。

その意味で、基本的な考え方、魅力ある水産海洋教育の在り方について論点を整理しました。これをひとつの叩き台にして、皆様からご意見をいただきたいと思っております。

「1 基本的な考え方」についてですが、

- ・水産業の変化（「沢山獲る」から、「海洋環境を守る、水産資源を育てる」へ）に対応した教育体制の充実（栽培漁業、水産加工、流通分野、環境教育、食育の推進等）
- ・遠洋漁業従事者育成から沿岸漁業後継者育成へ
- ・地域に貢献し、地域が支える学校づくり
- ・本県の食文化や地域的環境（県立大学や各種試験場と近接、「御食国」若狭の伝統）を生かした特色ある教育内容の編成

といったことが挙げられます。

「2 魅力ある水産海洋教育の在り方」ですが、

(1) 基礎的素養の定着

- ・生徒の望ましい職業意識・勤労観を育み、将来の社会人としての素養を定着
- ・生徒の基礎学力の定着を図るとともに、水産系大学への進学を拡大

(2) 新たな水産海洋教育の展開

- ・地球環境問題、マリンスポーツなどに関する学習
- ・農業、工業など、他の専門分野との連携による新しい教育活動の展開
- ・「御食国」若狭の伝統ある食文化の継承、商品開発や地元特産品の活用等を通じた新たな食文化の創造

(3) 関係機関との連携強化

①地域との連携強化

- ・企業との共働による商品開発、販売
- ・小中学生の学習機会の提供
- ・海洋環境保全活動の推進（アマモの定植活動等）

②県立大学、試験研究機関（栽培漁業センター、水産試験場）等との連携強化

- ・大学教員や研究機関の専門家による授業実施
- ・教員の交流による資質・指導力の向上
- ・県立大学等との共同研究、研究成果に基づく商品開発

③水産海洋交流センターとしての機能

- ・大学、企業、地域住民等が参加する研究発表会、イベント等を開催

(4) 実習船の有効活用

- ・生徒主導による、県民・小中学生等の体験航海
- ・大学等と連携した海洋調査

といったことが挙げられます。

次に、水産教育における全国の高大連携の例を紹介いたします。

①東京海洋大学は、東京、神奈川、千葉、さらには富山の水産学科を有する高校と協定を締結し、大学の出張講義や公開講座等を実施しております。

②三重大学は、三重県教育委員会と協定書を締結し、大学の高度な教育・研究に触れる機会の充実やスーパーサイエンスハイスクールでの連携協力、サマーセミナー、高校生向けの公開講座などを行っています。

③東海大学では、静岡、東京、神奈川の高校と教育交流協定を締結し、8月に特別プログラムの講義や実験等を実施しています。

④近畿大学では、附属の新宮高校と、総合学習の授業を基本に、学年に応じたプログラムを用意し、講義のほか、施設見学や水産実習などを行っています。

本日、ご出席いただいている神奈川県海洋科学高校は、東京海洋大学、東海大学と連携を行っております。後ほど、その状況についてもご説明いただけるとお伺いしております。以上で説明を終わります。

続きまして、小浜水産高校の概要、特色ある取組み等につきまして、山森校長から説明をお願いします。

### ○小浜水産高校説明

山森委員

それでは、資料2をご覧ください。小浜水産高校は、日本で最初にできた水産高校で、今年、創立115年です。このことは、教員・生徒が誇りにしているところです。また県内唯一の水産高校であるという特色を生かして、いろいろな教育、部活動、地域貢献活動を展開しています。

沿革ですが、昭和38年に、現在の小浜市堀屋敷に校舎が移転しました。海に近く、また、港や水産の関連企業、福井県立大学、各研究機関とも近くて、水産高校にふさわしい立地条件であると考えております。昭和46年に、専攻科漁業科を設置しました。以来、年平均3名が卒業して、海技士資格を取得して、それに関連する方面に進んでいきます。平成4年に小型実習船あおば、平成7年に大型実習船雲竜丸が竣工しまして、かなり年数も経っていることから、安全運航のために、新しい実習船の建造が望まれているところです。

学科構成につきましては、海洋科学科の中にマリンテクノコースとマリンバイオコースがあり、1年時からコース分けをしております。食品工業科、水産経済科の内容は、資料のとおりです。他に、2年制の専攻科漁業科を設けております。1年半の乗船、半年の座学により、20トン以上の大型船舶職員養成をしております。昨年度から、進学条件を拡張し、水産科全体から入学可能としました。

生徒数は表のとおりです。専攻科につきましては、現在3年生のマリンテクノコースから4名希望者がございます。

2ページをご覧ください。学習状況ですが、大型実習船は基本的には本科生と専攻科生の航海実習に活用しております。また、「多目的航海」と呼んでおりますが、地域の小・中・高校生や福井県立大学の学生、地域の方々に乗船をしていただいております。

進路状況につきましては、記載されているとおりです。今年の春、福井県立大学の海洋生物資源学科に1名入学いたしました。また今年の専攻科への進学者は4名で、3名がマリンテクノコース、1名がマリンバイオコース出身です。

特別活動、部活動等の状況ですが、特にボート部が全国トップレベルであり、19歳以下の日本代表の10名のうち、4名が本校生徒、1名が本校OBです。そのほか、ウエイトリフティング部、ヨット部、ダイビングクラブも頑張っております。ダイビングクラブは、小浜湾アマモマーメイドプロジェクトで、地域の方々をはじめ、行政、小中学生とも協力して活動を行っております。

今後の課題と対応方針ですが、我々は2本の柱で教育を行っております。1本は、日々の学習活動を充実させ、地域から信頼される学校にするため、きめ細かい指導や実習で鍛えるという意識を持って取り組んでおります。もう1本は、水産高校の特色を活かし、学校の魅力を高めるため、実習船を活用したり、地域・産業界・大学・関係機関との連携を深めようと、いろいろ取り組んでいるところです。具体的な取組みについては、本校教諭の小坂から説明させていただきます。

小坂委員

3ページをご覧ください。小浜水産高校の近年の取組みということで、まとめさせていただきました。まず基本的には、本校生徒が主体となり、研究活動やボランティア、出張授業の形で、様々な成果をあげております。またその中で、地域と大学、研究機関と組みまして、水産の現場に近い本校ならではの発想で、商

品開発や、現場の漁業者との連携を行っております。

各学科・コース、その他の具体的な取組内容は記載のとおりですが、実際は、これ以上の様々な活動が現在行われております。主に今回は福井の水産教育を考えるということで、福井県立大学や県との取組みについて紹介させていただいているのですが、これほどの取組みは、おそらく県内には他にないと思われま

す。また、研究はもちろんですが、私どもは、この研究を生かして、地域に一般化させるといふことに力を入れております。小学校・中学校・高校・また大学の生徒に対して、私たちの思っている現場に近い気質を伝え、それを生徒たちが研究発表に生かすことで成長していくといったことに力を入れております。

実際にこの発表活動を通じまして、水産庁や文部科学省から、非常に多くの賞をいただいております。またこれらの活動は、非常に教育的にも優れているということで、全国の教員の注目を集めております。簡単に内容を説明いたします。

マリンテクノコースで、今一番力を入れているのは、LED漁灯によるイカ釣り漁業であり、地元の漁船約30隻の漁船団を組みまして、東京海洋大学と連携をとりながらの共同研究、実際LEDを使ってイカが釣れるかどうかの活動をして

しております。また、バイオコースで、今力を入れておりますのが、マサバの養殖ということで、阿納の民宿の方や、県立大学、県の水産課とも連携をとりまして、養殖による若狭のマサバの復活を研究しております。

また、食品工業科では、エチゼンクラゲを利用した商品の開発を行っており、全国の食品科でもこのような商品化を行ったのは初めてということで、大変注目を集めております。

また、水産経済科の方では、新商品開発のパッケージデザインや販売の戦略ということで、若狭のシーフードカレーを加工組合の方と一緒に共同研究をしております。

その他、アマモの定植等の活動を行っております。以上です。

教育政策課長

続きまして、神奈川県立海洋科学高校の特色ある取組み等につきまして、島山教頭先生から説明をお願いいたします。

島山教頭

### ○水産教育に関する他県の先進的取り組み

海洋科学高校は、以前は三崎水産高校という名称で、68年の歴史がございました。今の場所に移転したのが昭和38年で、その前は三崎港に学校の前身があり、平成19年まで三崎水産高校でした。平成16年ぐらいから、学校再編ということで、神奈川県の後期再編事業に乗り、新しい水産高校づくりが動き出しました。平成18年10月に、県から公に単独再編の通達があり、新しく「海洋科学高校」に生まれ変わることになりました。平成20年4月開校ということになり、2年間前倒しされ、急ピッチで校舎のリフレッシュも含め、準備を進めてまいりました。

今年度、完全実施となりました。全学年の生徒が、海洋科学高校の選抜試験を受験して入学した生徒となったわけです。20年のスタート時には、神奈川県内の中学にも結構足を運びました。200の中学を、1校当たり2人の教員で回しまして、学校の説明をさせていただきました。

神奈川県の高校入試には前・後期がありまして、前期は80名の定員に対し、2倍の出願がありました。当然半分は不合格となります。後期にも同じ80名の生徒を募集しましたが、出願はぴったり80名でした。前期で全員取っていただければ1回で済んだのですが、これが神奈川方式ということです。話題は提供したのですが、思ったほど生徒は集まらなかったというのが、今の3年時生です。

2年時生も、前期は2倍、後期は1倍の出願で、ぎりぎり定員のスタートでした。原因は、水産離れ、海離れなど、いろいろなことが考えられますが、わかりませんでした。そこで、また1年間かけて中学校を回りまして、いろいろ検証した結果、やはり、保護者や生徒が考えるのは進路であるということでした。海洋になって、進路はどうなるんだというところが不安で、なかなか応募が伸びない。それで、大学や企業を回りまして、就職や進学の開拓をしました。

その結果、今年度は、前期80名に対し2・5倍の競争率でした。後期はまた1倍かなと心配しておりましたら、予想より上がりまして、2倍の160名の出願がありました。今の1年時生は、2倍以上の競争率を勝ち取って入学してきたということです。

学校では、入試をはじめ、実習の中身や授業、進路、これらをバランスよく運営していこうということで取り組んできましたが、今後は、中学校訪問や授業内容はこれまでどおり頑張り、進路については、更に本腰を入れて開拓しようと考えているところです。

それでは、海洋科学高校について説明いたします。スライドをご覧ください。

「夢に向かってチャレンジ!」とあります。これは、生徒一人ひとりの個性を伸ばす、自己の可能性を開拓する、心豊かな人間性を育むということです。

「海を知り、海を守り、海を拓く」これが校訓です。海洋科学科は2コースありまして、一般コースは定員120名、船舶運搬コースは定員40名です。

最初、大学科は「海洋科学」でスタートしようとしていましたが、文科省といろいろあり、大学科は「水産」となりました。今まで、海洋科学という学科はないもので、分類が「芸術・その他の学科」になってしまいます。

水産から海洋へ、というのが非常に大きな壁になりました。水産から海洋に移行すると、産業振興費というものがつきません。現在持っている船は、建造費用の1/3を国の補助を受けていますが、これを全部県の方から出さなくてはいけなくなります。また専門教科を教えている先生方の手当も無くなってしまいます。どちらかを選択しなくてはいけないということで、大学科水産を選びました。そのために、水産の必要単位の13単位と、海洋の単位を12単位、合計して25単位を卒業に必要な専門科目として取得させております。

また、単位制、2学期制を取り入れております。今日も6時間の授業を行っております。8月2日から夏休み、9月の第2週から前期の残りの授業を行い、9月の終わりから10月の最初まで秋休みを設けまして、10月の第2週から後期が始まります。今年はとても暑いので、正直、この制度はなかなか大変です。履修形態としては、各自の進路希望や特性、興味・関心に基づく科目を選択して学習します。

以前ですと、入学試験に合格した後に、学校の説明をしまして、その後入学式まで春休みがありました。単位制になり、3日間保護者同伴で来てもらって履修ガイダンスをしたのですが、これが大変でした。最初の予定では、3日間で3年間の履修ガイダンスをやって、進路を決定させようと考えていたのですが、とても無理だったので、1年生の分だけのガイダンスを行いスタートしました。このため、連休が明けるとすぐ2年次のガイダンスを始めて、担任や履修ガイダンスリーダーが中心になって進めているところです。前期で決定しなくてはいけないので、作業が大変です。

次に、カリキュラムの構成です。必修科目のほかに、「系」というのがあります。これが昔の漁業、機関、食品、無線といったものです。それから自由選択科目があり、特に進学を志望する生徒がこの辺の科目をとることになるかなと思います。

水産基礎と海洋科学基礎が必修となっております。そして、普通教科に加えて、

海洋研究、海洋利用、体験航海、マリンスポーツなどが1年時の内容です。体力づくりも必要なので、1年生は、週に1日実習所に行って、半日以上はカッターを漕ぐといったこともやっております。

生産基礎で湘南丸での実習を行います。湘南丸は650トンの船であり、1泊2日で体験乗船をしております。

水産基礎のマリンスポーツは、地域の中学生を授業に呼んで、生徒と一緒にっております。この前、他県で事故がありましたが、胴着を着て水中でひっくり返ったら、通常の人アウトです。胴着を着て潜ることはできませんので、この前の事故はそれが原因かなと思います。そのための訓練です。それから、手始めとしてシュノーケリングも授業で展開しております。

2年生の体験乗船実習です。去年は和歌山の岸本へ行き、湘南丸を宿泊所にしまして、3泊4日でマリンスポーツ等を行いました。インフルエンザなど、大変なこともありました。今年度は、伊豆の方で行うことにしました。海洋の専門性を深める系、これは昔で言う科にあたりますが、6つのうち2つは専攻科希望生のためのものということで、大きな科は4つということになります。

エコロジーサイエンス、これは昔でいう栽培、食品になります。以前は海・船・魚という3つの項目で動いていたのですが、海洋科学高校になってから、海・船・魚・空気、「環境」を大きく取り上げようということで動いております。

テクノロジーネットワーク、これが昔でいう機関科、通信科、最近では情報通信科とか機械工学科になると思います。非常にシラバスづくりや副教材づくりが大変で、先生方も初めてのことで、苦労しております。

グローバルカルチャー、これは進学の生徒がこれをとります。やはり、基礎学力が他の学校よりも定着しておりません。海洋英語A・B、海洋文学I・II、これは英語です。それから海の産業も英語を交えてやっております。進学のための英語力を付けることができます。

ライセンススポーツ、これは、フィッシングやダイビング、あるいはマリンスポーツに関する資格取得を目指します。これを取ってどうなるのか、ということもありまして、学校でも先々のことを心配していましたが、生徒の希望はとて多かったです。特にダイビングは、160名中70名が希望して困りました。機材は揃えてあるのですが、教える先生が8人しかおらず、苦労しました。今年の1年生は、12、3名に落ち着きました。フィッシングも同じく12、3名ということで、バランスが良くなってきております。自分の進路に結び付けて考える生徒が増えてきた影響かなと思います。

航海系、これは専攻科の漁業生産科への進学を目指します。船舶運航コースの38名の中からここを選びます。

スライドは、水産工学系、機関係の専攻科を目指す生徒です。両方とも、4月に遠洋実習に行って、6月21日にハワイの5泊6日の研修を終えて帰ってまいりました。帰って来た直後に聞いたところ、専攻科に行きたいという生徒が、合計で15名おりました。

ハワイ大学と高大連携を行っております。行く生徒は毎年違い、1日の体験講座という形になります。今考えているのは、留学までは厳しいので、向こうのハワイ大学で1か月ほど預けてみてはどうかということです。校長が非常に熱心に話を進めており、毎日のようにハワイ大学とメールでやり取りをしています。

次のスライドは授業風景です。海洋文学の授業で、映っているのは英語の先生です。また、特別なパソコンを入れ、自由に英語や数学の勉強ができる、コール教室と呼ばれる教室を現在作っております。

次は、先ほど述べました履修ガイダンスの一例です。履修と進路先のセットを作っておりますが、非常に難しいです。

高大連携については、東京海洋大学、東海大学と、公開授業や出張授業という形で、夏休みにみっちり行っております。静岡にある東海大学には4泊5日で、東京海洋大学の方も、通いで5日間です。また、年に3回ぐらい、出張講義をやっております。

進路ですが、高大連携、特別推薦など、そういうものをもらうたびに、あちこち走りまわっております。希望のある生徒は、昨年から100%進学ができております。

次のスライドは、進学先の大学、専門学校や就職先をまとめたものです。どこに行っても通用するよう、英語には力を入れております。最近では、どこの学校もキャリア教育を実践していると思われませんが、水産系の学校は昔からキャリア教育が充実しており、神奈川県内でも、わが高校は先を進んでいるのかなと思っております。

部活動です。残念ながら単位制にすると、3年時生の半分は、午前中に授業を終え帰ってしまいます。少しさびしいかなと思っております。

また、いろいろな連携事業を行っています。今やっているのが、アジアの大交流ということで、去年はインドネシア、今年は海を見たことがない中国の高校生が5月21日に来日し、うちの生徒と交流をしてもらいました。中国の山奥の高校生でしたが、国語と英語は日常生活で使用できるレベルで、本校生徒はとてもショックを受けておりました。帰るときには、こちらの生徒は中国語がカタコト、向こうの生徒の日本語はかなり流暢になっていました。それから、非常にまじめで、携帯電話は誰も持っていないし、礼儀正しい生徒ばかりでした。本校生徒も非常に学ぶべき点が多かったようです。

それから、海洋研究開発機構が近くにあるので、月に一回交流を行っております。一般公開のときには、うちの生徒が中心になって、お手伝いしております。

卒業生には、海洋冒険家の白石康次郎がおります。彼を中心に、国に対して、「海国（かいこく）日本を目指せ」というスローガンで、日本では、海を利用することは絶対に必要である、海は非常に大切であることを訴えております。民主党の安住議員さんが窓口になって、白石さんを中心に頑張っております。

東海大学の秋山教授もうちの卒業生です。マグロを山の中でふ化させて育てているということで、あと2年半ぐらいで出荷できるそうです。採算は十分に合うと言っていました。

本校は、場所としては非常に不便です。一番近くの駅からでも、バスで20分以上かかります。やはり駅の近くの方が生徒は集まると思います。

最後に、本校の学校説明会等の取組みということで、月に1回、学校で中学生に対して説明会等を開いております。以上です。

教育政策課長

それでは、皆様からご意見をいただく前に、本日ご欠席されました小浜水産食品加工協同組合の田中組合長様から、事前にご意見をお聞きしておりますので、紹介させていただきます。

（田中組合長意見：代読）

小浜水産高校では、アマモの定植、エチゼンクラゲのクッキーや宇宙食の開発、クラブ活動等、生徒に様々な目的を持ってチャレンジする楽しさを実感させており、着実に成果をあげておられます。こうした活動は、新聞やテレビ等のメディアにおいて連日紹介され、県立高校で最も特色があり、楽しく面白い学校だと思っております。

小浜の地場産業である水産加工業においては、これまで、小浜水産高校卒業生の300名以上の雇用実績があります。また組合では毎年、食品工学科の郊外実習を7～8社で受け持ち、即戦力としての活躍を期待しております。嶺南、特に小

浜の働く環境を考慮し、地域振興を担う面もお考えいただきたいと思います。

小浜で進めている「食のまちづくり」において、水産が果たす役割は重要です。こうした中、仮に小浜水産高校が総合産業高校に再編されると、水産教育の専門性が薄れはしないか、また特色ある活動を進めにくくなるのではないかと危惧いたします。(以上)

それでは、これまでのご説明の質問等も含めまして、皆様からご意見をいただきたいと思います。

### ○意見交換

下亟委員

民宿経営とトラフグの養殖をしております下亟と申します。

今、水産高校の現在の様々な取組みを聞かせていただくと、また近年メディアにも取り上げられているのを見ますと、水産高校が非常に魅力のある学校になってきているなと思います。今度の高校の再編で、水産教育がどうなるのかという局面を迎えているわけですが、水産教育は、地場産業の人材育成という意味で、欠かすことのできない教育だなと実感しております。

これから人材をどう育てていくか、先ほど海洋科学高校の取組みを聞かせていただきましたが、大変魅力ある取組みをされています。水産高校では、現在でも地元産業とかなり連携されているようですけれども、これからさらに魅力のある水産教育を行っていくには、さらに連携を強化して、生徒に地場産業をもっと知ってもらい、知識をもっと深めてもらう必要があります。

御食国小浜、食のまちづくりにも関係するということもありましたが、地場産業の育成と即戦力の育成ということが、一番重要なところじゃないかなと思います。水産業界自体もこれからの課題として、卒業生の受入体制を整え、相互に連携し活性化していければ一番理想的じゃないかなと思いました。

教育政策課長

島山教頭とお話ししたところ、海洋科学高校では地元の漁業者の方々と色々な機会があるということでしたので、少しご紹介願いますか。

島山教頭

当校では、水産科の科長が音頭を取って、漁業組合と新年の顔合わせ会をやっています。以前は各漁業組合の会長さんだけ参加していましたが、うちの卒業生が組合員にたくさんおり、たまには皆で会いたいということもあって、10年位前から、各組合長が組合員を引き連れて、横浜駅前の県民センターで行うようになりました。神奈川県は相模湾と東京湾という2つの大きな海に面しており、漁法や売り方、加工の仕方も違うんですね。そういう内容の交流ですが、現場に集まると同じ学校の卒業生が出会い、次の交流が生まれる。非常に価値のある会に発展してきたのかなと思います。うちの学校も1年間の経過を報告しています。先日、1泊2日の定位置網体験の発表をしました。前日に民宿に泊まり、2時に起きて4時に乗船、大変だったけど面白かったといった内容をお話しました。また、研究発表を組合ごとにも行っております。民宿のお母さん、遊漁船の方などもたくさん参加してもらって有意義にやっております。

それから、去年、ある組合でうちの卒業生を中心に朝市をやったら非常に好評で、全部の組合でやったらどうかという話があり、現在進めております。三崎の朝市は毎週日曜日の早朝、車が渋滞するほど賑わっています。横浜の漁業組合の本部では、新たに駐車場に食堂を作り、7月から海鮮丼を出しています。今後は傘下にある鎌倉、逗子、三崎の組合が、順番に獲れたものを紹介して食べさせます。毎日お昼に約500食を提供し、サラリーマンを中心に行列ができるほど盛況です。県の水産課の方々にもご尽力をいただき、漁業者交流会を行っている賜物と思っております。

浦谷委員

小浜で定置網と民宿を経営しております浦谷と申します。

今年2月に私の地元の内外海漁村青壮年協議会で名古屋の市場の視察をしました。その時、仲買人3名に出席していただいたのですが、予定より遅れてしまい、怒っているんじゃないかなという感じでした。ところが、話を始めると3人中2人が小浜水産高校出身ということで、一気に和やかなムードになりました。同じ高校の卒業生というのはありがたいことだなと思いました。

内外海漁村青壮年協議会は、漁師が集まっている協議会ですが、8割方は小浜水産高校出身です。みんな民宿や遊漁船、定置網など、諸々の沿岸漁業を営んでいる人たちばかりです。全国でも、水産関係で先輩方がたくさん活躍しておられると思います。ここで水産高校を無くすのはもったいないと思っております。

10年近く水産高校の生徒をインターンシップで預らせていただいております。見た目はちゃらちゃらしている子もいますが、非常にまじめに働いてくれます。きちんと仕事をこなしてくれる生徒ばかりで大変感心しております。

私は民宿も経営しております、アルバイトもお願いするのですが、最近の子は魚を触ったことがないということです。小浜水産高校を卒業した子は、全員魚をさばけるというくらい、調理も教えていただければ、魚食の普及にも繋がるのではないかと思っております。

また、できることであれば、せっかく小浜にある水産高校ですので、沿岸漁業についても、もう少し詳しく勉強していただければ良いかなと思っております。

最近の水産高校は、ボート部を始め、クラゲの研究など色々な話題が出ており、どれも明るいニュースばかりで卒業生として喜んでおります。私自身も水産高校を22年前に卒業しました。漁業科だったので、雲龍丸に3か月乗船して、ハワイ沖でマグロはえ縄漁業の実習をさせていただきました。一つの船の中で3か月間生活を共有するというので、クラス全体の連帯感、仲間意識が非常に向上したように思います。なかなか出来ないようなことばかり体験させていただき、卒業後の仕事に役立ったと思っております。

中島委員

私も小浜水産高校の昭和50年の漁業科卒業でございます。しばらく市内の企業に勤め、現在は民宿経営と養殖業、定置網をやっております。

当時は漁業科、製造科、増殖科という3学科があり、卒業生のほとんどが就職しました。漁業関係、製造・増殖関係の企業には、先輩方が多くて、就職も非常に良かったわけです。ですから、進んで水産高校に入学する生徒が多かった。ところが、水産業界が全般的に悪くなり、卒業生が就職できないということが影響して、生徒数の減少に繋がってきていると思います。

現在の学校の取組みを聞きますと、当時より非常に多岐に渡っていると思います。水産業界はこれからはますます必要になってくるところでございますが、卒業後のフォロー、水産高校を卒業した後、どこの大学に行けるのか、勤め先をどうしたらいいのか、そういったことが問題になってくると思います。ただ学校の中身だけを良くしても、後の目的が無いと、生徒に何がしたいかという目的意識が無くなってくると思います。例えば、水産高校を出れば水産関係の大学に入れる試験がある、こういう会社の募集がある、そういった話が色々出てこないで生徒が集まってこない。今後、その辺りを考える必要があると思います。

重田委員

私も小浜水産高校の昭和38年の卒業生です。その後大学へ進学し、現在の会社にいる訳ですが、卒業生の一人として、何としても県立大とタイアップして水産高校を残したいというのが一番の気持ちであります。

これまでの若狭地区高校教育懇談会における議事録を拝見すると、意見は出尽くしているような感じもします。そこで、今日の議題に合うか分かりませんが、

少し角度を変えてお話させていただきたいと思います。

日本は四方を海に囲まれ、水産業、水産教育は切っても切り離せないと思います。私どもの会社では、ノルウェーの鯖を使って鯖缶を作っております。だから言うのではないですが、日本は漁業先進国のノルウェーを見習い、根本的に水産業を見直す必要があると思っております。ノルウェーでは、小さい魚は獲らないように編み目を大きくし、大きい魚を選んで獲っております、ですから品質も良く供給も安定しております。注意深く資源管理をしており、漁獲量は同じでも漁獲高は年々上昇しているということです。これは捕獲する魚のサイズが大きいので、同じ量でも高く売れるということです。

日本の場合は、漁業者が一斉に出漁して、魚体の小さいものまで競争で獲ってしまう。オリンピック方式で獲るため、資源が枯渇して漁業が破壊する危惧があります。水産資源を国民の共有財産と位置付け、国を挙げての徹底した資源管理が必要で、豊かな海を取り戻すことから始めなければならないと思っております。

平成21年度の水産白書をかいつまんで申しますと、世界の水産物の消費は増加傾向にあり、特に中国ではこの30年間で5倍に増加しております。しかし、日本では昭和39年度をピークに、平成20年度には62%減少しています。今後も少子化や食料費の切詰め等によって、生鮮魚介類の消費は一層減少するが、調理食品の消費は増加が予測されるため、今後は色々な加工形態による水産の調理食品がターゲットになるとされております。これを水産教育の方向性として考えなくてはならないと思っております。また、基本的な考え方として、これからは「獲る漁業」から「育てる漁業」へ力を入れた水産教育をしていかなくてはならないと思っております。

それから残念な話ですが、少子化の影響もあり、中学では進学先として、一番に若狭高校、二番に若狭東高校、それから水産高校という順にランク付けされており、水産は二次募集で滑り止めとされることもあると聞いています。こういった点についても理解を求めていかなくてはと思います。

松浦委員

私は、市場開設者として、生産者と共に40年市場を運営しております。

現在心配しておりますのは、生産者が高齢化して後継者がいないということです。農林水産業ともに関連性があり、海は田畑と一緒にです。底引漁法のことを第3種と言いますが、海の底を引いて魚を捕ると、それが海を耕すということにもなります。それが今後無くなりますと、ただの澱んだ大海ということになります。

国の施策としまして、食料自給率のアップということが叫ばれております。東南アジアやアフリカの人口爆発により、将来、輸入水産物が入ってこなくなるのではないかという中で、日本で生産したものを食べなければいけないのに、それを作り育てる人が少なくなっています。私は再編というよりも、農林水産共に、独立の学校を強化していくべきだと思います。

生産者とか組合員、漁業者と言いますが、漁師さんは伝統工芸士と同じで、匠の技を得るためには相当な期間を要します。今後の方針にもあった遠洋漁業から近海漁業への実習を増やすということは、早々に始めていただきたい。甘鯛の刺しやはえ縄であるとか、スズキ縄、色々な漁法を若い人に覚えていただきたい。

卒業者が漁業に従事していないということには、飯が食えないということが前提にあります。この技術を取得したらこの漁業ができるとか、就職できるということが明確にあれば収入も安定します。漁業者の生活を3年なり5年は補助するというのも、日本の国策でもあります。高校も、再編というよりも、反対に独立校として強化していくべきだと思います。

青海委員

今日の会議の位置付けを教えてくださいたいと思います。教育長は、再編の間

題はさておき、水産教育や海洋教育はどうあるべきかということを中心に、ということでしたが、どうしても、再編の問題と絡んでくると思います。

広部教育長

今後の水産教育の在り方を、県立大や研究機関との連携等も含めまして考えていただきたいという趣旨でございます。水産高校の方向性はともかく、水産教育の充実が重要と考えております。特にアカデミックな視点から、ご意見をお願いできればと思います。

青海委員

今年は小浜水産高校から県立大学への入学生がありました。推薦入学でしたが、自分の考えをきちっとまとめて主張できる生徒でした。一般に小浜水産高校に限らず、職業系高校から進学してくる生徒は、人柄は素晴らしいのですが、入学後に二極化します。学年のトップになるような学生もかなりいる一方で、残念ながら、ついていけず学校を途中で辞めてしまう学生もいます。職業系の生徒であれ、目標の一つに大学進学を入れてもらい、そのための授業科目の充実というものに取り組んでいただきたいとは常々思っております。

さて、水産高校の地域での存在意義を考えますと、先ほどからご発言がありますように、地域の地場産業を下支えしている人材を輩出している実績があります。それはやはり、水産高校という教育の場で、仲間意識や、あるいはしんどいことでもやり遂げれば、その先に成果が見えてくることを実感させながら教育をされてきたことに、意味があったんじゃないかと思えます。

残念ながら、今は、偏差値で輪切りにされ、希望しないが来てしまったという生徒も多いのが現状です。しかし、これから日本人が、あるいは世界がどうやって食べていくのかを考えると、日本の周りには海や資源は大切です、食料自給率が全体で4割だとか、あるいは水産物でも5割ちょっとという現状では、この先将来の子どもたちのことを考えると本当に不安です。

水産高校に進学した生徒だけでなく、広く県民国民が海洋を再認識して、海やその生き物に、もっともっと理解を深めてもらうための1つの手段として、水産高校の存在も非常に重要だと思います。雲龍丸には、今でも相当働いてもらっていますが、そういう方向でさらに役割を果たしてほしいと思っております。

さらに、水産高校には、幸いにも専門性のある先生方がそろっておられるので、大学ではできない技術開発や現場と大学との橋渡しに、大切な役割を果たしてもらえんと思います。アメリカには、教育レベルで言えば高校レベルと思いますが、コミュニティーカレッジという短大のようなものが各地にあり、いわゆる4年制の大学の専門性と地域の課題とを繋いで、現実的な問題を解決していくという役割を果たしています。そこでは、受験で能力を発揮できなかった生徒も再チャレンジして、新しい人生のスタートに立てる役割も果たしていると聞いています。

先程、神奈川県立海洋科学高校の取組みが紹介されましたが、高校でここまでやれるのかと驚きました。大学とのバリアなども考えずに、なんでもやれるなど強く思いました。そういう意味では、高校で行える海洋教育も無限です。福井県も力強いバックアップをしていただいて、どんどんやれる範囲を広げて、海洋教育を魅力あるものにし、定員を満たすようお願いしたいと思えます。先生方や県はとても大変だと思いますが、発展的な形で海洋や水産に対する日本の教育の考え方を引っ張って欲しいと思えます。

広部教育長

私どもがこれまで試行錯誤しておりますのは、実際非常に定員割れを起こしておりますし、特に隣の石川県や富山県においても船を持たなくなるといった流れが来ております。ですから現実的に、水産教育の在り方を変える必要があるわけ

です。何か欠陥があって生徒が集まらないんじゃないか、そういった思いがあり、全国的に調査をしているのですが、どうも流れが、海洋の方向に行っているようです。本県もこれを採用してよいものか、そのあたりも含めて専門的な助言をいただきたいと思います。

国田委員

教育長が石川県の事例を挙げられましたが、私は、石川と同じようになっては困るという強い気持ちを持っております。石川県の水産高校は、小浜水産高校とほぼ同じ規模で、福井より3、4年後に設立しました。分校もあり、ずっと水産高校としてやってきたのですが、10年ほど前に学校再編があり、普通科高校と統合されて、水産は1クラスとなりました。

それが、去年は再々統合ということで、地域創造科という1つの学科の中に、農業と水産と商業と福祉の4つのコースができました。水産というものは消滅しかかっています。福井県では、このようになってはならないと強く感じています。このことは、教育委員会でもしっかり考慮していただきたいと思います。

教育委員会のご提案の方向性の1については、水産教育を消滅しかねないと思います。水産教育では、従来から体験学習を重視しており、どの学校でもやっているインターンシップは何十年も前から行っています。その中で、就業経験はもちろん、専門的な知識や技術を定着させるという考え方でやってきました。

また、部活動も盛んであり、先ほど話をされた松浦さんはボート部OBであり、昭和45年、インターハイ、国体で全国制覇を成し遂げたときのレギュラーメンバーでした。前年度にも、国体では優勝しており、国体2連覇という偉業を成し遂げられた方です。私もその当時、岸本監督が選手を率いて小浜駅に凱旋した時に、学校を挙げて駅に出迎えに行ったのを覚えております。

そういう伝統が今も続いています。近年、小浜水産高校は、さらに新しい伝統を作っているなという印象を受けております。それは、先ほど学校からも報告がありましたように、生徒の活動が多様に行われており、しかも、水産・海洋の専門の分野を大いに利用した活動が多いわけですね。環境保全のアマモ定植もそうですし、その他の研究活動もそうですが、こういった活動がまた、新聞やテレビ等でもよく報道されます。地域の人々が、水産高校を見る目というか気持ちというのが、以前とはかなり変わってきています。市民からも、小浜水産高校は近頃よくがんばっているとよく言われるようになっております。

そんな中で、再編の問題も挙がってきておりますが、生徒が市民と一緒に活動している中で、アマモと同様に生徒も成長しており、学校の教育だけでなく、市民の皆さんにも育てられております。こういう環境にある水産高校の生徒は幸せだなと思います。また、これらの活動は、学校全体で取り組んでいます。もし、総合産業高校になった場合は、このような活動が出来るのか疑問です。これからの行く末というのは、今生徒たちが取り組んでいる活動を保証する内容でなければならぬと思います。

市民の方々にも、水産高校の方に来ていただいておりますが、私は、こういう取り組みを通して、水産高校が市民に開放された、水産・海洋のセンター的役割を果たしつつあると感じております。県立大は研究内容等からも敷居が高く感じてしましますが、水産高校は気軽に足を運んでもらえます。センター的役割を果たす上で、いろいろ活動しやすい面があります。学校規模が小さいことが問題視されますが、規模が小さくても、生徒たちは部活動やその他の活動を活発に行っています。規模が小さいことを逆手に取って、いろいろ頑張っているのが今の小浜水産高校の1つの特色かなと思います。

例えば、不登校の生徒にもきめ細かい指導ができるので、立ち直って卒業していく例も多々あります。また、不登校の本人にとっても、大規模校より小規模校

へ行った方が、学校へ行きやすいという側面もあるのではないかと考えております。これは、生徒指導や進路指導でも、同様なことが言えるのかなと思います。

石原委員

私は兵庫県の尼崎市出身でございまして、兵庫県立尼崎高校を卒業し、近畿大学の水産学科を卒業して、福井県の採用試験を受験しました。学生時代に魚を育てる経験をしたことがあり、今の仕事のベースとなっております。もし自分が高校で水産というものを学んでいたならば、また人生は変わっていたのかなと思うこともあります。特に、水産高校における水産教育の重要性は十分認識しているつもりです。

行政の視点で考えますと、進路につながる成功事例を掘り起こす必要があると思います。今水産課でも、様々な支援事業を実施しておりますが、こういったことを、小浜水産高校と県立大学、あるいは試験研究機関との連携をより考えて行なう必要があります。私も平成7～9年に栽培漁業センターに勤務しておりました、その時に小浜水産高校の生徒と一緒に、魚の放流の実習を体験してきました。こういった取組みは他にも考えられると思いますし、我々もこれから精一杯汗をかきたいと考えております。

広部教育長

本日は、例えば小浜水産高校から福井県立大への一定の推薦入学者の制度であるとか、また、雲龍丸は、あと数年すると寿命が来ると思われ、その後どうするか、例えば県の行政部門と、または近県の水産高校と共同で何かできないかなど、踏み込んだ議論を考えていたのですが、時間的に無理なようでございます。水産を学ぶ生徒が、よりよい教育とよりよい環境で学べるよう、今後も継続して検討していきたいと思っております。その上で、水産教育の在り方の議論を深めてまいりますので、その折には、またよろしく願いいたします。

小坂委員

一言だけお願いいたします。今回の会合に先立ち、地域の方からいろいろ意見を聞いてまいりました。水産教育を何とか支えていきたいというありがたい言葉を頂戴しております。今回の問題に関しては、水産高校に大きく2つ問題があると思います。それは、水産教育の内容の充実と地域における在り方です。

今回は、水産教育をより魅力あるものにした上で、生徒の募集や進路先につなげていくといった話だったと思いますが、そのために、水産高校をもっと充実してほしい、具体的には、拠点校として残してほしいと地域の方はおっしゃいます。また、募集が埋まらないのは、地域で3番手になっていることに起因している部分もあるのではないかと思います。こういった地域の意見もご理解していただけたらと思います。

## ○閉 会

教育政策課長

まだ御意見もあることと存じますが、時間もまいりましたので、本日の議事についてはここで終了させていただきます。本日はお忙しい中、貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

—以上—